

「特別活動～中学校～」私の実践（1）

関 範夫

1 はじめに

平成16年3月、37年に及ぶ感動と感謝に満ちた横浜市立中学校での教職生活を卒業した。そして、4月からは横浜市教育委員会嘱託として教育相談員生活が始まった。わずか4年間であったが、教育を外から眺め、学校と保護者や市民との懸け橋となるように努めてきた。数々の発見や多くの方々との出会いは新鮮であり嬉しいものであった。

そして、縁あって平成20年4月から神奈川大学非常勤講師として特別活動の授業を担当するようになった。

37年の教職経験があるとは言え、初めての授業は不安に満ちていた。対象は大学生である。準備の段階から心配や緊張が堂々巡りしていた。だが、教壇に立って約40名の学生に話し始めると、不思議なことに不安はすっかり消えていた。喜びと自信に変わっていたのである。この年になっても教職魂が健在だったことが無性に嬉しかったことを憶えている。

一人でも多く教職採用試験に挑戦してほしい。一人でも多くいい先生になってもらいたい。自分の40数年にわたる教育体験を学生に還元することが、私の使命であり責任と考えている。また、それは長年お世話になった教育界への小さな恩返しと思っている。

今回のささやかな実践報告は、毎授業の後半に展開するグループ討議の様子と、毎回提出するレポートを中心にしたものである。

特別活動の本質を追究しながら、対応する教師のあり方を学習していく過程を紹介してみた。また、グループ討議を繰り返す中で、全ての学生が考え方を深めコミュニケーション力を高めつつある様子も紹介してある。

さらに、授業を通して新たな発見をしたり、特別活動への思いを深めたりと私自身が改めて考えたことも記述してある。

まとめることで見えてきたことが多々ある。今後の授業改善への貴重な契機となるものと思われる。

2 授業計画

「特別活動」は前後期とも15回の授業で、前後期毎に履修する学生は異なる。多い時は60名程だが、平均40名程度である。15回の内容は次の通りである。

- 1 教育課程編成と特別活動
- 2 特別活動の目標とグループ発表準備
- 3 特別活動の内容とグループ発表
- 4 学級担任と望ましい学級経営
- 5 学級活動
- 6 生徒会活動
- 7 学校行事（概要とねらい）
- 8 学校行事Ⅰ
（儀式的、文化的、勤労生産・奉仕的）
- 9 学校行事Ⅱ
（健康安全・体育的、旅行・集団宿泊的）
- 10 特別活動と人間関係づくり

- 11 部活動
- 12 指導計画作成と配慮事項
- 13 特別活動の評価
- 14 特別活動に関わる諸問題
- 15 まとめと学級指導案作成

これら「特別活動」は、全ての学生が大学入学前に体験してきたことである。それらを振り返らせながら、その意義やねらい、教師の関わり方や配慮すべきこと等を伝え考えさせていくのである。さらには、生徒との接し方や、どのように困難やトラブルを乗り越えていくかを自分の体験も交えながら授業を進めていく。やがては、教師のやり甲斐や喜びを伝えることになるはずである。

また、特別活動のねらいである「集団活動を通して自主的実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」を実体験させるべく、毎時間グループ討議を設けている。このことによって各自の見方、考え方を深め、コミュニケーション能力の向上をねらいとしているのである。

授業の進め方

90分の授業は、毎回およそ次のようである。

導入は最近のニュースや話題になっている教育に関わることなどを話す。これは多くの学生が毎日のニュースに疎い傾向にあることが分かったからである。未来を担う青年、とりわけ教師を目指す学生たちは常に社会や世界の動向を把握してほしいからである。

次は前々回の授業で提出されたレポート3～5点を読み上げる。その回のテーマをどう考えて記述してあるか、他の仲間の感想や意見を伝えるのである。名前を伏せてのレポートは、なるべく多くの角度から述べているものを選出している。仲間のレポートを聴くことは、各自にとって大きな刺激となっているようである。全てのレポートを聴き終わった後、簡潔にその感想や意見を記入させているが的を射ているもの

が多くある。

その後の40～50分は本時の講義となる。毎回2～3枚のレジメを用意しそれに沿って学習している。

後半の20～30分はグループ討議となる。グループは6名前後を基本とし、初めのグループ編成は学生に任せ、第2回編成(7～8回目)はくじ引きとしている。グループ討議は、その日の授業内容に関するテーマや今日的テーマを提示して多角的に話し合わせるのである。まとまった回答を得ることがねらいではなく、他人の考えを傾聴し、それらを参考にして自分の考えを膨らませて述べることを目的としている。

この討議の姿勢として重視していることは、さまざまな見方考え方を否定的に捉えないことと、模範的な回答を求めているのではないということである。

グループ討議終了後は、テーマについての自分の考えをレポートとして提出することになる。(資料参照)最初に抱いた自分の考えが、仲間の見方や意見を聴くことによって変化したり確信したり、豊かになったこと等を含めてのレポートである。こうした経緯によってコミュニケーション力を高め、自己の生き方を深めたいとの思いである。

初めの頃は多くの学生が消極的な姿勢だったが、回を追う毎に積極的になってきたことがよく分かる。それは、グループ討議の様子や毎回のレポート記述内容が如実に物語っている。レポートは全てに私のコメントを記入して、2週後の授業に返却している。

つまり、集団活動を通して自主的実践的な力を伸ばすという特別活動のねらいを教室で体得させているわけである。まさに特別活動の理念である「為すことによって学ぶ」の実践である。

今回の実践報告は、このレポートを中心に紹介してみたい。

3 「学級開き」の緊張と喜び

私が楽しみにしている一つに、第1回授業がある。言わば「学級開き」の授業である。何名が受講するのか、学生の名前も分からない、中学校とは異なり事前資料がないのである。

学生たちは、どんな内容の授業なのか、どんな先生なのかという好奇心と観察の目に満ちている。しかし、最初の授業は重要である。本時の内容を講義した後、私は各自に自己紹介を書いてもらうべく自分の自己紹介を簡潔に述べることにしている。趣味や学生時代のエピソードなど身近な話をする。特に自分の失敗談や挫折体験を加えることにしている。

そして、各自に自己紹介を書いてもらう。このレポートを読むことが楽しい。出身地や家庭環境、これまでの学校生活の様子、趣味特技、性格や将来の夢等、実に多岐にわたり詳しく書いてある。

私はこの自己紹介を熟読し、各学生毎にメモする。少しでも一人ひとりを理解するため、折ある毎に話しかけるきっかけにするためである。その後はグループ討議となる。グループ編成（6名前後を基本とする）は、座席に近い者同士等、彼らに任せる。どの年度も1～2分で話し合いの姿勢がとれるようである。

まず班内で自己紹介をする。何となくぎこちなく、よそよそしさが漂っている。そして第1回テーマ「中学生の実態を知る」を提示する。教師になるためには、目の前の対象を理解することが重要である。各自が通り過ぎてきた「中学生」を、さまざまな角度から調べたり考えてみようということである。

各グループで、どの角度から、どういう切り口で中学生をクローズアップするかという話し合いになる。やがて、各グループ内で分担を決め、次回までの宿題となる。終盤近くなるとどの班も、少しずつ雰囲気も柔らかくなってきているように見える。

縁あって出会ったクラスである。この後、全

体がどのように成長するかのポイントとなる第1回目の授業である。

授業最後に、「次回はグループ毎に写真を撮らせてもらう。皆さんの顔と名前を早めに憶えるためである」と告げる。この写真は各学生を理解するためには効果的である。

4 レポートからみる「理想的な先生」

2回目の授業は、特別活動の目的や歴史を中心に講義する。後半はグループの各自が調べてきた「中学生の実態」を話し合い、3回目の授業での発表に備える。この辺りから各グループは活発な話し合いとなってくる。そして、グループ討議後のレポートテーマは、「あなたが考える理想的な先生とは」を提示する。今回は討議なく、各自の考えを述べてもらう。

これは、前回授業で自己紹介を書いてもらったが、いつも注目することがあるからである。それは教職課程を履修するわけや教師になりたい理由は「いい先生に出会えたから」との記述が約90%以上はある。それを受けてのレポートである。

ほとんどが自分の体験に基づいての記述であるが、反面教師的なものも若干は含まれている。その代表的なレポートを数点紹介してみたい。

① 忘れられない言葉

ほめる時にはほめ、叱る時には叱るというけじめある先生にあこがれる。中学の部活の先生はそういう方で、部活に所属している生徒のことを「第二の家族」と表現していた。その分、挨拶などの礼儀、学習面や学校生活などで問題を起こしたらきつく叱られたが、今思うと叱られたことが私の中学校生活の財産のように思える。優しいだけだと、信頼関係を築くことは難しいと思う。「第二の親」のような先生を目指したい。(A男)

② 影響を受けた先生

分からない事をしっかりと教えてくれたり、「この授業楽しい!」「面白い」「苦手だけど好きになった」と生徒が思うような授業をしてくれること。独り善がりの授業でなく、生徒がしっかり付いてきたり、生徒と共に考えながら答えを導き出すこと。中学校の先生がそうだった。ただ慕われるだけでなく、授業がしっかり出来る先生になりたい。(B子)

先生に必要なのは厳しさだと思う。その厳しさとは、ただ怒ったりして怖いというのではなく、生徒を甘やかさない厳しさのことである。何かを聞かれたらすぐ答えるのではなく、まず生徒に考えさせるなど。自分が面倒と考えずに、「この厳しさはこの生徒のためになるか」を常に考えたものでなくてはならない。

私の小学校5,6年の担任は当時の私にとってはとても厳しく嫌だった。しかし、彼女から教わったものが現在の私の根幹であり、長所になっていると事ある毎に感じている。(C子)

③ 理想的な先生

生徒一人ひとりに人間として接することのできる先生。上から目線ではなく、対等な存在として接することで、生徒たちに伝えられることは多いはず。

個人の意見を押し付けるのではなく、自分の体験や知識、考えを“一例として伝えること”で生徒たちの興味やモチベーションを引き出してあげることのできるナビゲーター。

生徒各人は進む路が違うので、教師自身が自分の好きな事に懸命な姿を見せることで、情熱を伝染させたり、人としての生き方を示せること。

とにかく何かのキッカケを作ってあげることが大事である。(D男)

以上、ごく一部の学生の、しかもレポートの抜粋である。だが、例年ほとんどの学生が同じような内容を語っている。

児童生徒の感覚の鋭さと感受性の豊かさは承知しているつもりだったが、改めて思い知らされた。児童生徒はさりげなく教師の言動をしっかり見ているのである。そして、強く心動かされたことは彼らの心と頭にはっきりインプットされているのである。

授業対象者は大学2年生が中心であるので、小学校だと6~8年前、中学校だと4~6年前のことである。短時間に書き上げるには、よほど記憶がはっきりしているのであろう。いや、何十年経っても教師の記憶が鮮明に生き続けている人が多いということは、種々の証言や文献からも明らかである。

いい面悪い面も含めて、発達途上の児童生徒に与える影響の大きさを再認識させられた。紹介したレポートのように教師の言葉を支えたり、進路を決める契機となったり、人生の目標としてみたり、一人の人間形成・人生設計に少なからず関与しているのである。そこに教師のやり甲斐があり、恐ろしさがあるのである。

レポートの多くにみられた教師個人の生き様や率先垂範的姿勢が、無言の説得力となって児童生徒の心に沁み込んでいくのであろう。教育の成果はすぐには出にくいものだが、生徒一人ひとりの人生に関わっていくこともあるということに改めて肝に銘じていきたいものである。

5 中学生の実態を知る

第1回目の授業、後半の約10分がグループ討議となる。「中学生の実態を知る」という大きなテーマに対して、各グループでどの角度から調べ考えるかを話し合う。そして分担を決めて次回に持ち寄ることになる。

2回目の授業の後半、各自が持ち寄った資料を各グループで検討後まとめて、3回目の後半に発表することになる。

毎年度、さまざまな視点から調べてものをまとめ、考察することになる。その調査内容は多岐にわたる。それは、家庭に関するもの(例

家での過ごし方、朝ごはんの実態、小遣い、睡眠時間等)、学校に関するもの(例 好きな教科、部活動、不登校、進路に対するもの等)、人間関係に関するもの(例 親子関係、友人関係、いじめ等)、社会に関するもの(例 テレビ視聴、ケータイ問題、インターネット、なりたい職業、流行に関するもの等)、思春期に関するもの(例 男女交際、悩みや疑問、おしゃれ等)、広範囲にわたっている。

調査の手段は、インターネットによるものが圧倒的に多い。その他は中学生に直接尋ねる(きょうだい、バイト先の生徒等)、母校に行つて先生方に聞く。図書館の本や資料によるとなっている。

一グループ2分程度という制限の中での発表である。ほとんどのグループが代表一名であるが、時には複数発表もある。なるべく資料を見ないで話すこと、時間を守ることを伝える。

グループで選ばれたとは言え、誰もが緊張している。全てのグループが発表し終えた後に、各グループで簡単な反省アンケートを記入させる。

その後、全ての発表を聞いての感想や意見を各自がレポートに記入する。さらに、自己評価等を記入して全員が提出することになる。それらの主なものを紹介してみたい。

① グループでの反省より

ア グループでの協力、まとまりについて

- ・ 協調性はあったが、発表者にかかる負担が少し大きかった。
- ・ まとまっていなかったため、次回への反省にしたい。
- ・ 意見は出し合えたが、まとめる段階が物足りなかった。

イ 発表について

- ・ 2分間という制限があることで、内容をまとめることの難しさを感じた。
- ・ 話す口調や早さによって相手に伝わりづらい部分があったかもしれないが、

2分間にしては深いところまで発表できたと思う。

② 個人レポートより(抜粋)

ほとんどのグループがインターネットで調べている中、少数ながら友人のきょうだいに聞いたり、塾の生徒に聞いたりとの声を調査している班の姿勢が素晴らしいと思った。

ネットで調べると情報が古かったりすることがあったり、情報源によって差が出るので、さまざまな情報を収集しなければならないと感じた。

ネット社会が進む中で、中学生の意識も変わっているのだと強く感じた。(E男)

対象を分析することの大切さを学んだ。一つのものごとには多くの側面があるので、可能な限り総合的に判断することが重要である。

また、調査する方法は多くあり、データーを鵜呑みにしないことの必要性を感じた。

この発表を通して、グループ討議のよりよいあり方を学んだ気がした。(F子)

実態と言っても様々な観点があると思った。また、全く異なるテーマでも考察すると似たような性格が伺えた。免許を取り学校現場に行く上で、中学生がどんな状態で、何を求めているかを理解していかなければ相手(中学生・保護者)の求める教育が出来ないと教えられた。

(G男)

以上3点を紹介した。

自分に関わる対象物や人間をしっかりと把握しておくことは、全ての職業において重要なことである。中学校教師を目指すためには、中学生の特徴や実態をしっかりと理解しておくことが大切であることを分かってほしいのである。

全ての物事や人間には、多くの側面や見方があることを知ることが大切である。今回の「中学生の実態を知る」のように、中学生の捉え方

にも多くの切り口があることを理解することである。

また、最近の風潮であると思うが、ネット上の数値やデータ等を信用し過ぎる危険がある。その情報源によっては同じ調査項目によっても大きな差異が生じることもあり得る。レポートにあるように数値を丸ごと信用せず、他の方法等で確認することが必要であることを理解させたいのである。

まだ出会って間もないグループメンバーである。少しでも早く話し合いを充実させるためにも、実際に頭と言葉を使って心を柔らかくしてほしいとのねらいもある。

6 心に残る特別活動

第4回目の授業の後半、各自が体験してきた特別活動の内容をグループ内で紹介する。グループ討議も慣れてきたこともあり、各グループともスムーズに話し始める。

特別活動はその学校の特徴や雰囲気がよく表現される言わば「学校の顔」である。懐かしそうに自慢したり、地方による差異に驚いたりして、盛り上がる時間である。そして、討議終了後には一人ひとり「心に残る特別活動」のレポートを提出する。

毎年度、特別活動の多岐にわたる状況や心情がよく述べられている。そのいくつかを紹介する。

① 学級活動

中学1年の冬、定年間近の担任の先生が倒れて入院した。その時私は学級委員を務めていて、千羽鶴を作ることになった。そんなにまとまりの悪いクラスではなかったが、先生がとても信頼できる方だったので今まで以上にまとまった。昼休みや放課後も鶴を折り続けた。折り方を聞いたり、欠席の人は家で作り誰かが取りに行ったりして完成した。

早い快復を願う一人ひとりの気持ちのこもっ

た千羽鶴を病院に届けた。その甲斐もあってか先生は体調もよくなり、3月初めに学校に戻ることができた。定年退職になる最後の学級として、先生の教えを体現できてよかったと思う。

(H男)

② 生徒会活動

自分の母校は生徒会を独自に「愛修会」と呼んでいた。そして校歌とは異なる「愛修会の歌」というのがあった。しかし、歌われなくなっていたので愛唱していた当時の先輩をお呼びして歌い方を聞き、それを広め伝統を復活させた。

また、種々のきまりの見直しをしたことも強く心に残っている。役員をやってよかった。

(I男)

③ 体育祭

中学3年時のクラスは仲が悪く、全然まとまらないクラスだった。体育祭練習もまとまらず、先生に怒られてばかり。皆気にすることなく適当にやり過ごしていた。そんな時普段はおとなしい団長が激怒した。そこから少しずつではあるが、友情が芽生え優勝することは出来なかったがクラスはまとまることが出来た。

今思えば団長の一言はものすごく勇気のいる決断だと思った。特別活動を通してクラスにまとまりが出来ることは青春の貴重な体験だと思った。(J子)

④ 合唱コンクール

中学3年時の合唱コンクールが一番だ。私たちが選んだ曲は、担任が以前担任したクラスでも選ばれたが、最優秀賞を取れなかったことを知った。そこで、私たちが取ってあげようとクラスが一致団結することになった。

だが、練習で音程が合わないなどの技術面での障害とともに、声が小さい、男子が歌ってくれないなどの問題があった。パートリーダーだった私を含め何度話し合いや注意したことか分からない。リハーサル時もうまくいかず、学

年としての雰囲気の中でも最優秀候補から外れていたと思う。

しかし、担任は私たちに温かい言葉をかけてくれた上、今までの頑張りを認めてくれた。それが私たちにとって大きな励みとなった。本番では緊張の中、普段の120%の力を出し切り、最優秀賞をもらうことができた。

その後のHRで顔をぐちゃぐちゃにして、担任やみんなで大泣きしたことを憶えている。

(K子)

以上、学級活動、生徒会活動、学校行事とあらゆる場面から挙げている。

①の学級活動場面の記入は多くないが、非常時の学級の様子がよく述べられている。

熱意ある教師との出会い、結束が強い学級集団、苦難を乗り越えた学級への印象が強いようである。

②の生徒会活動での思い出は多くない。私の授業には生徒会役員を経験した学生が約1～2割いるが、記述する者は少ない。これは後の授業でも取り上げるが、生徒会活動の低調さにあるようである。また、生徒会は生徒自ら学校生活の向上を目指すという意識が薄れている証とも思われる。それ以上に、生徒会活動に対する教師の意識の低さにあるように思われる。

③の体育祭は多くの者が挙げている。全校生徒と地域保護者と取り組むこと。力を発揮する目標が明確なこと。団結や協力がし易いこと。結果(成績)がその日のうちに明らかになること等、印象に残る要素が多いからであろう。

④の合唱コンクールは、修学旅行に次いで多くの者が挙げている。まさに心の結束が問われるからと思われる。発表までの過程で苦しんだクラスほど、発表し終えた時の感動は大きいようである。その合唱曲が卒業時に蘇ってくることを想像するだけでも、合唱行事の魅力の大きさを痛感する。

いずれも中学校を卒業して5年以上を経てい

る学生たちの脳裏に鮮明に記憶されている場面である。今回紹介したレポートはごく一部であるが、その他のレポートもみな生き生きと躍動している。改めて特別活動の持つ教育力を痛感するのである。

7 まとめ

毎時間に提出するレポートは、2週後の冒頭に読み上げる。一つのテーマについて多くの角度から述べているものを選んで、匿名で紹介する。その時間学生たちは聴くことに集中させる。3～5名のレポートを全て読み終わってから、その感想や改めて気づいたこと等を自己評価欄(資料参照)に記述させる。

今回は「心に残る特別活動」レポートを聴いて感想を紹介する。

中学時代、私はひねくれていて学校行事に対する意識も薄く、きわめて消極的だった。しかし、今回多くの人のレポートを聞き、各活動にそれぞれの目標があり、先生方も生徒のために様々なアプローチをしていることが分かった。過去を悔やむ気持ちになった。(L子)

一人一人が違った思い出を持っているが、どの思い出もその活動によって何かを学んでいる。また、自分一人で行うものでないため、教師や友達と何かを行う楽しみを得ること、協調性を学ぶことへと繋がっているのだろう。授業とは異なり生徒主体で行うことが多いため、伸び伸びと生徒らが活動している情景が分かる。リーダーシップを持たせるという意味でも重要だと思った。(M男)

どれも友人やクラスメートなどの団結力に感動したということが多かった。まとまった時の感動とか、皆と目標を成し遂げた時の感動は、大学生や社会人になってからはなかなか味わえないと思う。中学生という個性豊かでまとまり

にくい時代だからこそ感動も大きかったのだろう。こういう体験が、大人になって「まとまりたい!」ということに繋がっていくのであろう。

(N子)

どれも特別活動の本質に迫る記述である。特別活動のねらいや良さをしっかりと捉えている。特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」とある。言わば人間性と社会性の育成と生き方を考えさせる道場でもある。

昨今の日本社会は多くの課題を抱えている。生命軽視の風潮、コミュニケーションや自己表現の苦手な若者たち、思いやりや協調性に乏しい人間関係、無気力無感動で目標や希望を持っていない人間の増加等々、深刻さを増している。

こうした時だからこそ、「自らを律しつつ他人とも協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」という情意面。「逞しく生きるための健康や体力」という身体面。特別活動が持つこの二面こそ「生きる力」に大きく影響していくのであろう。長い人生を支え、方向性を定めるためにも学校教育でしっかりとその基礎を身に付けさせておきたい。

また、教育は感動から生まれ育っていくと考える。生徒に感動場面を多く与える仕掛けを作ることが教師の仕事の一つであろう。先のレポートにもあるように、感動がやる気を喚起し結束力を引き出すのである。そうした感性を刺激し育てていくことに大きな影響力を持っているのが特別活動と思っている。

以上、今回は第4回授業までの後半部分の様子を紹介しただけである。しかし、工夫改善しなければならない点が多くあることに気づかされた。それは、特別活動の本質に迫り、それに

関わる教師のあり方を追究するためにも貴重な振り返りの契機となったことは確かである。

また、学生たちはグループ討議で話し合いを充実させ、考えをまとめて記述するという体験を繰り返す中で、特別活動への考えを深め、人間的にも成長していくことを信じ期待している。

今後も魅力的で効果的な授業の創造に努めていきたい。

特別活動論レポート NO.4 < 月 日 > 学生番号 氏名

演習4 中学時代の心に残る特別活動の一領域を選び、具体的に述べてください。

領域名 < >
グループ発表で心に残ったこと グループメンバー ()

自己評価

- ① 「理想的な先生」の発表を聞いて、どんな感想を持ちましたか。
- ② しっかりと自分の考え等を述べ、他人の考え等を聞くことができましたか。
- ③ 本時の授業で気づいたこと、学んだことは何ですか。